

「待ちつづけて

二十年ののちに得るものは、

三千枚の金貨よりも大切な何か

であるかのような気がした。

二十年待てた、ということの凄さが、

自分を大きくさせる……。」



2010年 光文社

金貨イラスト:赤井雅佳氏画(『BRIO』連載第1回挿絵)

## 「Story

死期の迫った入院患者から告げられた三千枚の金貨の隠し場所。探し当てれば、すべて自分のものにして良いという。

齊木光生は、5年前入院していたときに偶然居合わせて聞いたその話を突然思い出した。その患者と出会うきっかけをつかった、元看護師で現在は銀座のバーの店主である室井沙都と、光生の同僚・川岸知之と宇津木民平と光生の4人は、砂漠の中から一粒の砂金を探し出すぐらい困難とも思われる宝探しを始める。

その裏には、一人の男の壮絶な人生が隠されていた。

【BRIO 2006年4月号～2009年8月号連載】

## シルクロードの旅

この作品は、主人公の齊木光生が勤続10年の祝いとして1か月の休暇と旅費をもらい、乾河道という、敦煌から天山山脈の南麓に沿って存在する、かつての大河の跡への旅から帰国したところから始まります。

宮本輝氏は、『ひとたびはポプラに臥す』(1997年 講談社刊)の執筆にあたって、1995年に38日間にわたり、中国・西安から天山南路のオアシス都市を経て、標高約5,000mのクンジュラプ峠を越えてパキスタンを抜けイスラマバードまでを陸路で辿る、6,700kmにおよぶ取材旅行を敢行しました。

旅の一部は本作品だけでなく、『草原の椅子』や『星宿海への道』等でも描かれていますが、宮本輝氏の旅路を、主人公をとおして読者も体験したような気持ちになります。



タクラマカン砂漠

## せりぞれよらう 芥沢由郎が遺したもの

「三千枚の金貨を探す」という、ワクワクする宝探しの一方便、芥沢由郎という謎の人物の一生がこの物語の太い柱となって語られる。語る相手によって人物像が大きく分かれる芥沢由郎という人が本当はどのような人物だったのか。とても僕に会ってみたい気がした。